

日光を訪れた二人のイギリス女性
—イザベラ・バードとメアリー・ダヌタン—

井戸 桂子*

Two Victorian Ladies Visiting Nikko in the Meiji Era
— Isabella Bird and Mary d'Anethan —

Keiko IDO*

Abstract

Since the beginning of the Meiji era, foreigners have been visiting the Toshogu Shrine and Nikko area, according to the records in a series of Journals of the Shrine. This paper analyzes the prosperity and the charm of the Nikko area through the experiences of two women, Isabella Bird and Mary d'Anethan.

For Victorian globetrotter Isabella Bird, Nikko and the Kanaya Cottage Inn, which she visited in 1878, meant the last comfortable place she visited before making the challenging and hard journey to the unbeaten tracks of Hokkaido. Almost twenty years later, she revisited Nikko after the most dangerous and harsh trip took her to the middle of China. She was healed by the European community in Nikko along with her old friend, Minister Ernest Satow and his circles including a younger English lady Mary d'Anethan, the wife of the Belgian Minister.

Mary and her husband found a nice Japanese style summer house on the shore of Lake Chuzenji in 1896, in the same year Satow built his own. Here, Mary enjoyed a happy private life ; she rowed and had lunch or dinner with amiable friends, while in Tokyo she had to live the official diplomatic life.

The Nikko area attracted many foreign visitors. They could visit the Toshogu Shrine, which was, and still is one of the most precious religious visiting spots. It was also convenient to go to Nikko, which afforded comfortable accommodation and beautiful scenery, especially in the Chuzenji area. Adding to this attractiveness, the community life amongst the circle of foreigners provided relief from the stresses and strains of the official life in Tokyo.

Nikko was the only area in Meiji Japan, where Europeans could enjoy their relaxed private life in the midst of the sacred mountains.

*人文学部 国際文化学科

はじめに

第1章 明治期の日光発展の契機 ～イギリス人3名の交叉～

第2章 イザベラ・バード ～日光は「快適な生活」～

第3章 メアリー・ダヌタン ～「美しい湖の端の小さな日本家屋は気に入った」～

第4章 英国から日本へ ～ヴィクトリア朝の女性として～

おわりに

はじめに

日光は明治期から在京の外国人の関心を集めていたが、その紹介者ともいべき人物は、イギリス外交官アーネスト・サトウである。しかし世界旅行家イザベラ・バードと、ベルギー公使夫人エリアノーラ・メアリー・ダヌタンも、その先駆性と日光を愛した点では、サトウに引けを取らない。

この二人は、どちらもイギリス女性で、サトウを軸に、実に興味深い人生航路の交わりを展開している。この女性たちは日光で何を見て、日光に何を求めたのであろうか。

本稿では、二人のイギリス女性にとっての日光の意味を、彼女たちの軌跡をたどりながら考察する。また今回、筆者は東照宮のご厚意により、『社家御番所日記』を東照宮御文庫にて調査することができたので、この3名をはじめとする外国人の東照宮参拝記録についても述べたい。

第1章 明治期の日光発展の契機

～イギリス人3名の交差～

第1節 パークス英国公使の東照宮参拝およびサトウによる日光の紹介

～『社家御番所日記』から その1～

東照宮を主体に長く栄えてきた日光は、明治維新を迎え事情が一変した。経済的な逼迫、やがて神仏分離令による東照宮と満願寺の分離を迎えた^{注1)}。また、徳川時代には考えられなかった外国人の東照宮参拝が始まった。それは、明

治3年(1870)5月のことであった。明治維新から、まだ1年半しか経っていない時である。

『社家御番所日記』によれば、明治3年(1870)旧暦4月8日に、県令より、英国公使以下士官6人婦人1名、付添16人、人足20人で登山する旨が通知された。11日当日、一行は唐門で靴を脱ぎ、「かむりもの」も同じく取り、拝殿にて参拝したが、「奥院江も参拝いたし度旨掛合」、社家側での相談を経て、「此度限り参拝被致可」ということで、奥の院に昇殿した^{注2)}。

県令よりの通達はあったが、『社家御番所日記』には「英国公使」と書くのみで、パークスという固有名詞はなく、「婦人壱名」もその夫人であるという記述はない。東照宮側にしてみれば、まずは脱靴してくれたことに安堵したのであろう。しかしそれも束の間、奥の院昇殿を希望されて困惑し、今回に限りということで許可している。

ところで他の外交団に先駆けてイギリスがまず東照宮に参内したことも、当時の在京外交団の状況を投影して興味深い。すなわち、イギリスは明治維新に際して新政府側と密接な関係を持つことに成功し、当時も他国に一歩リードして外交団の中心である。加えてイギリスの外交方針には、任地先の事情を詳細に調べることがその外交交渉に役立つという考え方があり、サトウ初め館員は日本国内をくまなく探査し始めている。その踏査研究結果は本国へ報告されるだけでなく、在京の外国人への貴重な情報とし

て提供された。

こうしたイギリスの伝統からすれば、公使自らが夫人をともなって、徳川の聖地であり、朝廷も例幣使を二百数十年参向させていた東照宮を訪問したい、奥の院にも参拝したい、と希望するのは、ある意味当然である。維新後1年半しか経ていないのも、決して早すぎることはない。

外国人側にしてみれば、一度英国公使が参拝したとなれば後に続くことはたやすい。【社家御番所日記】^{注3)}には、「夷人」「異人」「外国人」がすでに翌年には来訪したことが記されている。

そして明治5年(1872)旧暦2月、英国外交官アーネスト・サトウが代理公使アダムズと来見した。【社家御番所日記】には、このときの来訪がパークスの時以上に詳細に記されている。栃木県令から不都合不敬のないよう指示され、「県の失態」とならないようにとの文言まで通達にある。前回の希望もあるので奥の院も掃除して迎えた。

そのサトウは中禅寺までの訪問と東照宮参拝の模様を、イギリス外交の伝統により克明に記録し、『ジャパン・ウィークリー・メール紙』同年3月号と4月号に記事を掲載し、さらには、ガイドブックとして結実させた。すなわち、同社から明治8年(1875)に*A Guide Book to Nikko*を発行した。42頁というささやかな英文の日光案内書であるが、英文のガイドブックとしては明治6年の京都、明治7年の横浜に続く三冊目である。それだけ外国人の関心を集めていたことを示すし、また一方では、この案内書のおかげで、多くの外国人が日光を訪れることとなった。サトウが日光の紹介者と言われる所以である^{注4)}。

サトウのガイドブック発行に加え、外国人に

とって幸運が続く。すなわち同じ明治8年(1875)に「外国人旅行免状」の訪問先として日光が選定されこと、明治4年(1871)から「鈴木」が外国人宿泊客を受け入れ始め、明治6年(1873)に「金谷」も「金谷・カッタージン」として続くなど宿泊施設が整ってきたこと、明治5年(1872)に千住～宇都宮間に鉄道馬車が通い、明治18年(1885)の鉄道開通まで交通手段として役立ったこと。明治の初期に、これだけのプラス要因が重なり、外国人が日光へと赴きやすくなっていった。

第2節 増え続ける外国人の参拝

～【社家御番所日記】から その2～

外国人の増加に伴い、【社家御番所日記】の記述にも変化が見られる。サトウによる日光紹介記事が『ジャパン・ウィークリー・メール紙』に掲載された明治5年(1872)の夏には、外交団でない一般の外国人の来訪についても、「夷人」「異人」「外国人」として、その供の数までも記している。温泉に行った外人もあると記し、驚きを隠せない様子である。あるいは、「今日も」異人が来た、という「も」の表現にも、社務所側の驚嘆が窺える。

しかし、次第に訪問全てを記すことはなくなった。県や外務省からの通達付きの場合のみ記し、それもすべてではない。たとえば明治9年(1876)夏、フランス人エミール・ギメの訪問は政府の要請があったため記載された。しかしお雇い外国人のモースは、明治10年6月に来見したが記載されていない。

実際ギメによれば、英語とフランス語での注意書きの立て看板もあったようで、いかに外国人来訪が頻繁になってきたかを示している。そしてギメ自身、これだけの来訪があるなら、きっとあの「優美な鳥」も来るに違いないと予測する。すなわち、「バード」である。すでに旅行

家として有名になったイザベラ・バードも、きっと日本の日光に舞い降りるはずだ、というのである^{注5)}。

明治11年(1878)、そのバードが来日した。東京で公使パークスとサトウから旅の注意を受け、日光では東照宮雅楽の楽人である金谷の「金谷・カッタージイン」に泊まり、そのあと、本当の意味での彼女の旅、すなわち東北と蝦夷という外国人未踏査地への旅を始めた。【社家御番所日記】を今回筆者が調べてもバードの名前は記されていない。このことからわかるように、日光は外国人にとっては、すでに定番の訪問先になりつつあった。バードは3か月後無事に東京に戻り、サトウの家でコンサート鑑賞などくつろいだ時を過ごした。帰国後この日本旅行記 *Unbeaten Tracks in Japan* (邦訳『日本奥地紀行』) を出版し、大変なベストセラーになった。表題の原意は、「日本の未踏の道」すなわち外国人がまだ踏み固めていない奥地のわだちであり、ヨーロッパの読者への日本紹介という意味では、サトウのガイドブックをはるかに超えたインパクトを与えたのである。

外国人の来見は、東照宮参拝者数の増加だけでなく、日光の山内と町そのものに新しい動きをもたらした。皇室と日本の要人の滞在である。大正天皇は皇太子時代、最初は東照宮元社務所の「朝陽館」に、その後田母沢に御用邸が建築されてからは同邸にたびたび行幸された。また外国人の夏休みの習慣が要人たちにも広がり、日本人も夏を避暑先で過ごし始めた。従って日光の賑わいの契機は、まさに外国人、ことに外交団の来見であり、その契機となったのはサトウらイギリス人の来見である。そして来見の第一目的は、もちろん東照宮参拝である。明治29年の二社一寺参拝者は、10万人を超えたという

記録がある^{注6)}。

【社家御番所日記】にも明らかなように、東照宮が初めは困惑しながらもパークスやサトウの参拝を受け入れ、次第にこれが当然のことになっていったからこそ、外国人も参拝のために日光という土地に行きやすくなり、ひいては避暑先となったのである。こうして日光は、交通手段、宿泊施設の整備、そして皇室と外交団の滞在という榮譽も加わり、維新前後の困窮からは想像もできない賑わいを迎えた。

第3節 中禅寺の別荘生活

～その先駆者はイギリス人～

しかし、山内の賑わいと喧騒は、先駆者の外国人には好ましくないものであった。そこで彼らが向かったのが中禅寺である。(奥日光の土地の名前としては中宮祠であるが、中禅寺湖という名称から、外国人は Chuzenji と呼んでいたのも、本稿でも、中禅寺と記す。)

初めて中禅寺に別荘を持った外国人は、お雇い外国人であるイギリス法律家のカークウッドとされる。明治20年(1887)という。条約改正以前であるので、もちろん外国人別荘の土地は借地であった。

カークウッドに続いたのが、幕末にサトウと共に長崎で活躍したイギリス人の商人グラバーである。東京で仕事をしていたグラバーは、故郷スコットランドにも似た中禅寺湖で釣りが出来ると知り、早くからこの地を訪れ、明治26年(1893)に地元で大崎と言われる湖畔に別荘を持った。

そして外交団では、明治28年(1895)に公使として再来日したサトウと、明治27年にカークウッドの別荘を訪れ感激したダヌタン夫妻である。どちらも明治29年(1896)の同時期に別荘を持った。

明治30年代になり日光山内が混み合ってくると、ますます奥の中禅寺の涼さと景勝に惹かれて、夏をこちらで過ごす外国人が増加する。明治27年（1894）にレーキサイトホテルが開業、明治40年までには交番、郵便局、人力車、パン屋、クリーニング店まで夏は店を出し、別荘地の環境が整っていった。難所の中禅寺坂にはつづら折りの新道が工事され、まず人力車が、やがて大正末には自動車を通れるように広げられた。そして大正時代から昭和初めにかけて、中禅寺湖畔には各国外交団の別荘が並び、外国人の華やかな別荘生活が開展することになった^{注7)}。

ところでサトウと同時期に別荘を持ったダヌタンはベルギー公使だが、おもに別荘に滞在したのは夫人のメアリーで、出身はイギリスである。サトウという英国公使がいたことも、彼女にとっては心強かった。そして興味深いことに、サトウやダヌタンが夏の滞在を開始した明治29年前後に、あのイザベラ・バードが中国韓国旅行の途次、夏をこの日光中禅寺で過ごしている。イギリス人で日光を紹介した人々が、このとき中禅寺で再び交わったのである。二人の女性の軌跡をたどり、彼女たちにとっての日光の意味を考えたい。

第2章 イザベラ・バード

～日光は「快適な生活」～

第1節 46歳の訪日まで

イザベラ・バードの果敢な東北・蝦夷地への単独旅行を思い浮かべると、一見若い元気な女性のような印象がある。しかし、バードは来日中に47歳を迎える中年の独身女性であった。当時の公使パークスが50歳、書記官のサトウが34歳であるから、二人の英国紳士側としても、プロのグローブトロッター（世界漫遊家）として有名になりつつあるバードを、一目おくレディとして迎えた。まず、日本の地を踏むまでのバー

ドをたどりたい^{注8)}。

イザベラは1831年10月15日、北ヨークシャーのバラブリッジに、イギリス国教会の牧師エドワード・バードの長女として生を受け、1904年10月7日にエジンバラで没した。ヴィクトリア女王の在位が1837年から1901年であるから、イギリス女性バードの73年の生涯は、まさにヴィクトリア朝と共に歩んだものである。

エドワード・バードは若い時法廷弁護士としてカルカッタに赴くが、現地でコレラにより妻と幼い長男を亡くし、帰国後牧師となった。やはり牧師の娘でイザベラの母となるドーラ・ローソンと再婚したが、二人は共に比較的裕福な中産階級の出身であり、慈善活動の精神が家庭の基礎にあった。

イザベラは3歳年下の控えめな妹ヘリエッタ（愛称ヘニー）と一対をなす気丈な長女として、また、父が息子を亡くした故からか男勝りの長女として育った。ちなみに、この心優しいヘリエッタに宛てた海外からの手紙の数々が、彼女の旅行記として編纂され刊行されていくのである。10歳の時には乗馬をこなし、おべっかや不正を嫌い、正義感あふれる子供であった。しかも、両親が子供用の本やおもちゃを与えなかったもので、読む本は最初から大人の本で、7歳のときの愛読書が『フランス革命』であった。当時の女性教育としては一般的だが、学校には通わず、文学・歴史・フランス語・線描スケッチ・彫刻を母から、ラテン語・植物学を父から、化学・詩・生物学を独学で身に付けた。その教育の高さは例えばスケッチをみても、『日本輿地紀行』に収められた東照宮の陽明門をはじめ、かなり優れたレベルに至っている。こうした探究心旺盛な少女は、一方イギリスの伝統的な中流家庭の常としての女子の嗜み、礼儀、篤い慈善精神も授けられた。

このように理想的に見える彼女にも苦しみ

あった。小さい時から脊椎の病気に悩まされていたのである。しかしこの痛みが、却って彼女を肉体的に大胆に行動するよう追い込んだ。

こうしてバードはヴィクトリア朝のもと、厳しいしつけとキリスト教の奉仕の精神を授けられると共に、自ら学びどんなに苦しくても自己を改善し行動することを好んだ。その少女時代には、後のバードを彷彿とさせるものがある。伝統的な教育を受けたレディの姿と、果敢に挑戦し誇りを持つ女性の姿である。

18歳の時手術を受けるが体調不良で、この年から毎夏、バード一家は療養のためスコットランド高地に滞在する。この地の自然をバードは大いに気に入り、雑誌に初の紀行文を書いた。

そして23歳の時、初の海を渡る旅行をする。というのは当時、航海は体を癒し健康にすると考えられており、医者に勧められたからである。アメリカとカナダに渡りアメリカの民主主義という革命を目の当たりにする。帰国後、旅行中の自由さと英国の窮屈さのギャップを旅行記執筆により解消させようと原稿に向かい、1856年25歳にして最初の旅行記『英国女性の見たアメリカ』をマレー書店から出版した。ここに生涯にわたるマレー書店第3代目のジョン・マレーとの縁が始まったのだが、それなりに出版は手ごたえがあったようだ。

父の死後エジンバラに引っ越したが、1866年に母も病死すると、医者から勧められていた航海を決心する。1872年、41歳のバードは、7月にエジンバラを立ち、オーストラリア、ニュージーランドを旅行した。そのまま1873年ハワイ諸島に渡り、7か月滞在し乗馬で島をめぐるなど楽しみ、その模様を記した詳しい消息を妹に送った。その後アメリカのロッキー山脈で数か月療養し、1874年になって帰国した。そして妹への手紙を整理したものが、1875年、『ハワイ諸島の6ヶ月間』としてマレー書店から出版さ

れた。この旅行記は広く読まれたので、1876年来日のフランス人のギメにも旅行家バードとして認識され、きっと東照宮にも舞い降りるだろうと予測されることになった。

第2節 『日本奥地紀行』

～プロの旅行家として～

母国では脊椎の痛みを抱える病弱な婦人であったが、長旅へのチャレンジが心身ともにプラスになることを知っていたバードは、またも積極的に異国旅行へとはばたき、ギメの予言通り日本に舞い降りた。それは、明治11年（1878）のことで、彼女にとって初めての英語の通じない国、キリスト教の布教も再開されたばかりの国への旅である。

在日の著名なイギリス人宛の紹介状を40通以上も携えての来日には、イギリスの伝統的中流階級の誇りと緻密さがうかがえる。進化論で有名なダーウィンにも、日本行きを強く勧められた。東北地方や蝦夷地を訪ねた理由は、一つには牧師の娘として新潟と函館にある宣教拠点の慰問を希望したことだが、また一つには人類の社会進化論的な立場から、当時の先進欧米の学者たちがアイヌの人々に関心を寄せていたからである。

アメリカと上海経由で横浜に到着したバードは、オリエンタル・ホテルに泊まり、東京では英国公使パークス邸に滞在する。横浜ではヘボン師宅で面接した伊藤を通訳に雇い、パークスからもサトウからもたっぷりと旅行の注意を受けた。

6月10日、まずは日光へ向かって旅立つ。明治11年とは言え、日光に限って言えばサトウのガイドブックも出版されており、既に外国人が踏査している地である。未踏地を探索するのがバード流の旅であり、簡便な宇都宮への鉄道馬車や表街道は使わない。栃木からは比較的知ら

れていない例幣使街道を辿り、意地を見せた。

バードの日本での旅そのものについては、これまでにもいくつかの研究があるので、ここでは彼女が日光で何を体験したか、またその後の未踏地の旅とどこが違ったかを指摘するにとどめたい^{注9)}。

まず、ヘボン師から紹介を受けて金谷邸に滞在したが、非常に好意的に記している。杉並木に感心しながら日光へ入ったバードは、ここに10日間近く滞在する。前泊の旅館では障子の穴から相客に見つめられ、蚤にも襲撃されて困り果てたのだが、ここではゆっくりと過ごした。家の清潔さ、立派さ、金谷家のハルさんとユキさんの優美さ、おけいごと、子供たちの礼儀正しさ、金谷さんの旅客業への関心などが、同じ趣味と洗練さを持つ人間の眼から書かれている。日本の中上流階級の家と暮らしぶりに接すると、イギリスの同じような立場の女性としてその価値を十二分に理解し高く評価する。異文化といえども、質の良いものを良しとする。これが彼女の価値観の基本である。逆に、貧困、優美さに欠けるもの、西洋流の美的感覚からいえば醜いものに対しては手厳しい。このあとの東北での農村の暮らしや貧困は評価しない。同じ日光の中でも、父親たちが子供に愛情を抱いていることには感心しつつも、貧困を容赦なく指摘する。

東照宮参拝を果たした後の感想は、「美の虜になった」と賞賛の一言に尽きる。芸術性の高さを認める。しかし、離れたら忘れたと正直にも書く。とはいえ、異文化でも高い価値ならそれを認めることはバードの長所である。

そして、「10日間日光にいたから結構と言えようになった！」と、日光結構の諺に触れながら、いよいよ日光を離れ奥地旅行に入る。日光までは「快適な生活」「ぜいたくな生活」であるが、そのあとは「未踏の地」であった。

日光が文明と非文明の、外国人の訪問地と未踏地の境目なのである。日光では日本の優雅な人々に会えるが、それはある意味先進国のイギリス人と会っているのと変わらず、蝦夷まで行かなければ、当時の社会進化論でいう未開の人々に出会えないのである。会津、新潟、山形とすすみ、途中、伝道の根拠地で西洋人と過ごして一息入れながら、蝦夷に渡り、アイヌの人々とも交流した。時には幼い子の喉に刺さった魚の骨を抜いてあげるなど、医療行為のようなこともしているが、伝道自体は行わない。ただただ正直に、また冷徹に、現地の人を観察し綿密なスケッチと共に記録に残す。ペンを持つ果敢な旅人である。

そして北海道から海路で東京に戻り、サトウら在京の英国人からの招きを受ける。そのときはバードもレディとして優雅な時間を過ごし、また社交を楽しむ。12月に香港に向かい、明治12年(1879)1月にはマレー半島5週間の旅を敢行する。2月にカイロを訪れ5月に一年半ぶりに帰国する。今回の大旅行での日本とマレー半島の経験は、その前のロッキー山脈滞在と共に、それぞれ旅行記となって出版され大反響を呼んだ。

第3節 結婚と死別

～家庭のレディとしての10年間～

1879年5月に帰国し、その後の10年間、1889年2月まで、バードは大きな旅は一度もしない。プライベートで大きな人生の転換を経験したからである。

彼女の一番の理解者である妹ヘニーと二人で仲良く英国で暮らすイザベラには、第3番目の人物は不要であった。実際、本人も旅をする自分は結婚向きでないと思っていた。日本に行く前年、エジンバラの誠実な外科医のピシヨップから求婚されたが優柔不断な返事しかしていな

い。イザベラと10歳年下のビショップはハワイ旅行後に植物学を通じて親交が始まったが、植物学は当時中産階級の女性の嗜みでもあった。一方ビショップは彼女を心から尊敬していた。日本、マレー、エジプトという長い旅の間も待っていた。しかしイザベラは帰国後、まずは『一人のレディのロッキー山中生活』を1879年に出版したところ大評判を呼び、つづいて日本旅行記の執筆に忙しく、結婚の申し出を断った。

しかし『日本奥地紀行』を脱稿したのとほぼ同時、1880年の6月に妹が病気で亡くなった。ヘニーは、遠い国からの手紙の宛先、つまり旅行記の最初の読者であるという意味で姉の偉業の理解者であっただけでなく、心遣いの細やかさ、忠誠心といえるほどの誠実さ、自己主張しない謙虚さによって彼女を支えてくれた人物であった。そして悲しみから逃れて夏にスイスで静養した後、秋に妹と同じく献身的な愛を自分に向けてくれるビショップと婚約し、翌年3月に結婚した。ただその式にはゲストは招かず、新婦は黒い喪服だった。

新婚生活にも妹とバード家を悼む気持ちが影響し、新居には父母の写真やアジア旅行の思い出の品を並べる部屋をしつらえた。ただ財政的には、親戚の遺産を受けた上、本がよく売れたのでとても裕福であった。妻は自宅で執筆する以外は、エジンバラで勤務する夫を残し、妹の過ごした町トーパーモリーや、出版のことでロンドンに出かけていた。「私の（恋の）ライバルは中央アジアの山々」という夫は、旅行作家の妻の仕事を理解し許していたと言える。

しかし、夫は患者からうつった病気がもとで体調不良となった。1884年から没するまでの18カ月間、イザベラは夫を看病し、暖を求めて南に、例えばリヴィエラやカンヌに連れて行った。病気に対し敢然と向きあう車いすの夫を看病することで、彼女は初めて妻らしい気持となれた。

看病が「人生の目標」となり外界に出たいという葛藤がなくなって、素直に妻の責務を果たせたのである。女性の居場所は家庭であるべきだというヴィクトリア朝の制約をそのまま実行した。その夫は、1886年3月に没する。結婚生活は、わずか5年であった。

その後、気持ちを整理したイザベラは、いまや「完全に綱がなくなって、人生の残りを好きなように形成したい」ので、まだ元気なうちに「最後の」遠出をしたいとジョン・マレーに相談した。1889年（明治22年）2月、バード57歳のことで、10年の空白を経ての長期旅行である。

しかし、夫との（またそれ故の空白の）10年間はあったからこそ、彼女の残る十数年の旅人生に、一層の厚みが加わることとなる。

第4節 「医療伝道の旅」

再開された長期旅行は、前回までとだいぶ趣が変わった。まず行き先は、「夫と話していた」アジアである。しかも、「最愛の夫と私が深い関心を寄せる医療伝道の旅（a tour of medical missions）」を目的とし、具体的には北インドと中国の間、カシミール地方に「夫を記念した医療施設」を建設する。つまり自身で最後の旅かもしれないと考えた旅先の選定理由は、「夫と話していた」行き先だからであり、さらに夫に添うべく「医療伝道」を打ち出した。ことに「医療伝道」は、これから晩年の彼女の旅を、それまでの彼女の旅ともまた他のレディトラベラーとも違うものとして特徴づけた。

以前の旅は表向きは健康上の理由を主とし、内実はヴィクトリア朝の中流家庭での窮屈な境遇から外界に抜けだしたいという欲求もあった。しかし、いまや世に数々の旅行記を発表し好評を得ているバードことビショップ夫人は、他の女性トラベラーと違い、ことに『日本奥地紀行』出版後は優れた社会観察者として認められてい

る。そのビショップ夫人が旅を再開する。そのためにはより明確な目的が必要である。それが、「医療伝道」である。

「医療伝道」が表明された理由は、1つには「有り余るほどの豊富な」資金があること、次に幼時からの環境の影響によりまたヴィクトリア朝女性の嗜みにより伝道や医療伝道に関心があったこと（実際日本の東北でも簡単な傷の手当てなどを村人に施した経験がある）、などがある。しかしやはり一番大きな理由は、10年間を経て家族を悼む気持ちが彼女を動かしたことである。最愛の父母ばかりでなく、妹ヘニーを失った悲しみから湧く使命感、さらに最後の2年間しか尽くせなかった外科医の夫の遺志を受け継いだ使命感である。

そして1889年4月にカシミールのスリナガルで夫を記念する病院、同年10月には、アマリツアで妹の名を冠する病院を建てた。さらに後述するように、中国と朝鮮に病院を建て、日本では東京で孤児院建設の寄付をした。

母国はビショップ夫人の果敢な生涯に報いてくれた。インドと困難なペルシアへの旅から帰国すると、大変な栄誉が英国で待っていた。1891年、スコットランド地理学会特別会員に選ばれたばかりか、1893年はヴィクトリア女王に謁見し、英国地理学会の特別会員（ただし、「会員に相応しいレディたち」であり、会員ではない）に推された。しかしそのような世事に安穩としているビショップ夫人ではない。

1894年1月、文字通り最後の大きな旅に立つ。それは、アジアの中でも中国である。カナダ・横浜・神戸・朝鮮経由で、中国に入った。しかし6月の満州・奉天・北京は、まさに日清戦争のさなかであったので、ウラジオストク経由で12月日本に避難する。そして翌1895年、朝鮮経由で上海・香港に行く。その夏は日本で過ごす、12月再び朝鮮から上海に入り本格的な探索

に取りかかる。1896年1月から5月まで、上海から揚子江をさかのぼり中国西部まで大旅行をする。その夏は日本で静養し、秋は朝鮮に滞在し、1897年3月に英国に帰国した。アジアへの最後の旅であった。1901年にも70歳でモロッコを6か月旅行するが、3年以上にわたるこのアジアの旅が、ビショップ夫人の最後の大きな旅と言って過言ではない。

第5節 ビショップ夫人、日本との再会

～自らへの癒しは、日光～

この最後の大旅行の途中に数回、避難所としてあるいは静養先として立ち寄ったのが日本である。運命の神様のおかげで、ビショップ夫人が山内では「金谷ホテル」に泊まり、中禅寺ではサトウの別荘にくつろぎ、日光で心地よい時を過ごしたことを記して、イザベラ・バードの章を終えたい。

まず山内では「金谷ホテル」に明治28年(1895)9月と明治29年(1896)7月の二回投宿した。自宅の一部に外国人を泊めていた前回の「金谷・カッタージイン」とは違い、高台にリゾートホテルとして明治26年(1893)に新築されたばかりであり、盛んに外国人を迎えていた。

明治29年(1896)の訪日では、さらに幸運に恵まれた。奥日光でのくつろぎである。この地でサトウと旧交を温め、ダヌタン夫人メアリーと出会ったことは、ビショップ夫人最後の旅の中のかげがえのない癒しの時間であった。この交流は、出迎えた二人のイギリス人の日記に残っている。

サトウは19歳で始まった通訳兼書記官という領事部の仕事に飽き足らず、外交官としての昇進を果たすべく明治17年(1884)以来バンコックやブラジルという遠方への赴任を選んだ。そのおかげで政務の系列に入り、本国英国から遠く離れた極東の国ではあるが、館長職である公

使として再び日本に赴任した。離日して11年後の明治28年(1895)5月のことである。早速8月に中禅寺で別荘を借りたが満足できず、翌年明治29年(1896)に中禅寺湖畔にジョサイア・コンダー(日本での通称はコンドル)設計の別荘を新築した。

このまだ完成間もない、いや片付けも終わらないうちに招いた客人の中に、ビショップ夫人がいた。東京でもサトウはビショップ夫人に会っていたが、8月1日からしばらく別荘に滞在してもらった。そして客人をボートに乗せて外国人別荘での昼食会や夕食会に連れて行った^{注10)}。

また、同じ明治29年(1896)に中禅寺湖畔に別荘を持ったベルギー公使夫人エリオノーラ・メアリー・ダヌタンも、サトウと共にイザベラの湖畔の友人となる。メアリーは次章で述べるようにヴィクトリア朝の教育を受けたイギリス女性である。27歳年下ではあるが、イザベラの話にとってもよく耳を傾ける知識欲旺盛で快活な婦人であった。メアリーは「その服装は日本、シナ、ヨーロッパの奇妙な組み合わせ」を着たビショップ夫人を、「とても面白い婦人で、清国の奥地で経験したことを色々私に話してくれた」と記した^{注11)}。

このように、朝鮮と中国の過酷な旅のあと、見知った日本で、それも旧知のイギリス外交官が館長である公使として赴任していたので、どんなに心強かったか。しかも、東京の公務を離れた中禅寺に別荘を構えているとなれば、どんなに心が休まったであろうか。たとえ未知を探索することに興味と生きがいを持つ女性とは言え、癒しは必要である。グラバーらが言うように、スコットランドにも似た中禅寺でのひとときは、なんと嬉しいことであろう。そしてその後は、湯元温泉へも向かい、心身を休めたので

ある。

では次にもう一人のイギリス女性、ダヌタン夫人の日光との縁を明らかにしたい。

第3章 エリアノーラ・メアリー・ダヌタン

～「美しい湖の端の小さな日本家屋は気に入った」～

第1節 駐日公使夫人としての赴任まで

メアリー・ダヌタンは明治期に長く外交団夫人の首席を務めたベルギー公使夫人として有名であるが、イギリス人として生まれた。英国人としての資質を受け継いだ上流の家柄に育ち、教育を受けた女性である。まずはイギリス出身の夫人が来日するまでの歩みを明らかにしたい^{注12)}。

メアリーは1858年6月1日に、法廷弁護士ウィリアム・メイボーム・ライダー・ハガード(1817～1893)と妻エラの三女としてノーフォーク州のブラデナム・ホールと呼ばれる館に生まれた。ハガード家は landed gentry という裕福な大地主で家系は16世紀まで遡れる旧家である。10人兄弟のメアリーは上から9番目で、長兄は外交官ウィリアムであるが、世間的に最も有名なのは六男の小説家ライダー・ハガードである。また五男と七男も軍人で作家であり、メアリー自身も日記の他に小説を8篇発表しているので、教育が行き届き文才もある兄弟姉妹と言える。

メアリーが結婚したのは28歳、1886年11月ロンドンのことで、お相手はベルギーの外交官ダヌタン男爵であった。

夫となるアルベールはベルギー国王の官房秘書官を務めていたアンリ・アルマン・マリー・ダヌタン男爵の嫡子として1849年に生まれ、1870年に外務省に入る。1873年2月に岩倉使節団の接伴役を務めたことが日本との最初の縁で、明治6年(1873)6月から明治9年(1876)9月までベルギー公使館の二等書記官(途中一等

書記官へ昇任)として日本勤務をした。この期間、イギリス公使館のサトウ書記官とも旧知となる。イギリス女性メアリー・ハガードと1886年に結婚のち、明治26年(1893)10月に来日し、翌年8月に特命全権公使となる。明治43年(1910)東京に客死するまで長らく日本との縁が続いた。

この1893年から1910年という期間はちょうど明治日本が日清日露戦争を体験し欧米列強諸国に存在を示していく時期であり、在京の外交官たちにとって対日・対母国双方にその仕事の重みは増していくこととなる。公の立場に於いてダヌタン公使夫妻も多忙な生活を送るが、同時に結婚して7年で子供のいない44歳と35歳の夫婦という私的立場に於いても、東洋の地で互いの信頼が深まり、最後は夫の死を迎えることとなった。その中であって夫妻が日光とどのような縁を結んだかを夫人の日記に探りたい。

第2節 日光との出会い

～東照宮参拝、そして奥日光へ～

明治26年(1893)10月に赴任した夫妻がはじめて日光を訪れたのは翌明治27年8月である。

夫妻は来日した9日後、それも天皇皇后両陛下への拝謁の翌日に鎌倉に遠出したことが象徴するように、忙しい公務の合間を縫って、好んで外出をした。リゾート地としては箱根宮の下富士屋ホテルが最初の滞在先である。明治27年(1894年)3月末のことで、富士山の美しさに驚嘆し「日本人が富士を崇拝する気持ちを私はよく理解できる^{注13)}」と記す。その後初めて過ごす日本の暑い夏の避暑先も、同じく宮の下であった。そこではチェンバレンをはじめ在京の英国人と親交を交わした。しかし7月中旬に伊香保温泉に行き、8月18日伊香保から馬車鉄道と鉄道を乗り継ぎ最後は人力車にのって、激しい雨の中、日光にたどりついたのである。

日光は「筆舌に表しがたいほど美しい」し、8月22日に一通り見学した東照宮は「驚くほど豪華^{注14)}」と感激する。8月28日には既に親交のあった英国法律家カークウッドの別荘に招かれて、中禅寺に日帰り出掛けた。彼の「西洋人が建てた最初の家で湖の岸に建っている」別荘から眺めると、「明るい静かな湖の周りを、木がうっそうと茂った高い山々が取り囲んでいる景色は実に美しく平和そのもので(…)コモ湖の風景が私の心の中に浮かんできた^{注15)}。」と絶賛する。

9月8日には、特別許可による東照宮参拝をする。「この許可は皇室から貰ったもので、皇族以外は外国の公使にしか与えられない^{注16)}」と自身で記すように、光栄に思い楽しみにしていた見学である。

ところで【社家御番所日記】を調べてみると、外国人参拝の記録が減少している中でかなりの量の記録が夫妻について残されている。9月2日に前触れがあり、金谷ホテルよりも公使の訪問の申越しがあった。また【社家御番所日記】によれば夫妻は9月7日に来訪の予定であったが、雨のため翌日の8日午前9時に繰り延べられた。そのため、常宮周宮両殿下の来訪と同日になり、迎える東照宮としては繁忙となったようである。

さてその参拝の様子であるが、夫人の日記によれば、夫妻は拝殿の將軍着座の間にて絵画彫刻等の収蔵品を拝見し、高僧の歓迎の辞を受け公使が答辞した。その後大猷院も奥の院まで見学し、全体として「今までに見たことのないほどの絢爛豪華な目のご馳走」という印象を抱いた。そして心の中には「ソロモン王の建てた神殿」を思い浮かべていた^{注16)}。ちなみにソロモン伝説では、ダビデの子ソロモンが自らの王宮よりも先に建てた神殿は、壁と扉に彫刻が施され、床から天井まで神殿内部は全て純金で覆わ

れ、天使ケルビムも純金をまもっていたと言われる。さらに、夫人メアリーの実家の兄、ヘンリー・ライダー・ハガードはアフリカに数年滞在したこともあり弁護士の傍ら冒険小説を書き有名になったのだが、代表作は『ソロモン王の洞窟』という題名で1885年に発表した作品である。したがってメアリーがここで、異教国日本の豪華な宮にキリスト以前の古代のソロモン王の建てた神殿を重ね合わせて感心したのは、当然の流れである。

ところで来日一年日から赤十字活動等奉仕活動にも精を出していたメアリーは明治28年(1895)6月に外交団首席夫人となる。そのようなときこそ、夫妻は気分転換を大切に、また公使館の修理という事情もあり、東京を離れて暮らすことも多くなった。明治27年から28年にかけての冬、夫妻は在京のイギリス人たちと宮の下富士屋ホテルあるいは熱海に滞在して避寒の私的な時間を過ごす。明治28年(1895)夏の避暑先は日光ではなく、箱根である。その箱根富士屋ホテルへ8月16日に現れたのが「背が高くすらりとした紳士で、どちらかと言えば苦勞で疲れた様子」の新任英国公使サトウであった。夫の「1873年から76年にかけての同僚で、古い友人^{注17)}」は夫妻と同じディナーテーブルについた。

このサトウとの交友はすぐに復活し、5年後のサトウの離日まで頻繁にまた深く交際した。このサトウにより夫妻は日光へと導かれる。

サトウ自身は宮の下のと8月20日に来見し、すぐに中禅寺に向かった。湖畔では借りた別荘が不満だったので砥沢に土地を見つけ、コンダナーに設計を依頼し、別荘を建てることとなる。

一方、9月15日に箱根から帰京したダヌタン夫妻であるが、メアリーは10月に友人と日光に秋色を鑑賞しに行く。早速到着の2日後、10月21日中禅寺への登山を開始した。徒歩で行く者、

馬にまたがる者、椅子籠を使う者、普通の籠にする者、いろいろあったが、夫人は初め籠に乗ったものの窮屈で、結局大部分を自分の足で歩いた。「生まれてこのかた、これほど華やかな秋の紅葉を私は一度も見たことがなかった」と正直に話し、「目が眩むようであった^{注18)}」と大いに感激する。天候の関係で湯元までは足は伸ばせなかったが、中禅寺の旅館に泊まり、湖にボートを出し、ボートでサトウの新しい家の工事を見に行った。前年の夏に見たカークウッドの別荘に加えて錦秋の中のサトウの別荘工事現場である。ここでメアリーは中禅寺に別荘を持つということを真剣に考えることとなった。

この中禅寺滞在を含む「楽しい1週間」がメアリーに強い印象を与えた。大きな一歩を日光中禅寺へと踏み出すことになる。

第3節 中禅寺の夏

～サトウを通じたイギリス人との交流～

中禅寺の紅葉に目を奪われたメアリーは、翌年明治29年(1896)の初夏6月27日、日光に直行する。もう宮の下には向かわない。なぜなら、「美しい湖の端に建っている私たちの紙と木でできた小さな日本家屋」で過ごすからである。

6月27日に東京を発ち、まずは山内の新井ホテルに落ち着く。7月1日にはサトウも来て、先に中禅寺の自らの別荘に向かう。ダヌタン夫妻も快晴の峠を楽しく登り、湖畔の自分たちの家に到着する。文面から推測すると湖畔でも「菖蒲が浜」の近辺であり、サトウの住む湖畔の南の方の「砥沢」に行くには、ボートで湖を横切ればそれほど遠くない位置にある。そこの「小さな日本家屋」をメアリーは「とても気に入った^{注19)}」と日記に記す。

この家で、夫妻は思い出深い夏を毎年重ねて行くことになる。さらに不幸にして夫を亡くし、帰国の前に悲しみを抑えるためにメアリーが姪

と最後に訪れたのも、日光であった。

さらに前章でも述べたとおり、この明治29年(1896)の春にイザベラ・バードことビショップ夫人は中国内陸を旅し、それが終わって再び朝鮮の旅に入る前に立ち寄り静養したのが、ちょうどサトウやメアリーが避暑を始めた夏の日光中禅寺と湯元である。サトウはビショップ夫人を新築間もない別荘に招き親しい友人と交流した。ある典型的な往來の日をサトウの日記から抜粋したい。

8月5日

ビショップ夫人と一緒にダヌタン家へ昼食に行くと、ウォルター夫人とフレイザー夫人も来ていた。彼ら全員を誘って、うちでお茶にする。そのあとでラウザーとカロと一緒にボートに帆を張って、カロの家の方向に走らせた^{注20)}。

ランチ、お茶、ボートと中禅寺湖畔の別荘における社交の時間が広がっていく。

また、メアリー自身もビショップ夫人について詳しくコメントした箇所があるので抜粋する。

7月15日

『日本奥地紀行』等の著者ビショップ夫人が湯元へ行く途中、私の家によって昼食をした。彼女が覆いをした人力車から這い出してきたときの恰好は実に奇妙だった。(…)か弱い健康状態で、歳が63歳になるというのに、彼女は最も辺鄙なその地方をたった一人で旅行してきたのだ。何百人もの猛り狂った群衆に襲われたことが三度もあり、一度は大きな石で頭を割られたと彼女は私に語った。またそれとは別な時に、一軒の家の中に逃げこんで、ドアを堅く閉じて立て籠り、膝の上の拳銃を握りしめな

がら、じっと動かず声も立てずに座っていたことがある。大勢の怒り狂った連中がこのドアに押し寄せてきて、まさにそれが破られようとしたその瞬間、兵隊を率いた役人が姿を現したのである。彼女はこのような滅多にない刺激的な経験を重ねてきたので、休養のため湯元に行くことにしていた。そこで滞在中、朝鮮に関する本を書くつもりでいる^{注21)}。

ビショップ夫人は「63歳になるというのに」たった一人で中国の奥地で命を脅かされるほどの経験をし、休養のために湯元に行く。そして話術も執筆の実績も皆の認めるところである。片や外交団首席夫人を務める38歳のベルギー公使夫人で、気に入った日本家屋での別荘生活を開始したところである。そして好奇心にあふれ文筆活動にも関心があった。しかもどちらも、ヴィクトリア朝の女性としての教育としつけを受け、相手を尊重する。この会話がいかにかげろくだか想像できる。そうでなければ、メアリーがここまで目に見えるように生き生きと描写出来ないだろう。メアリーはイザベラをなんて面白い人物なのだろうと興味津々の思いで歓迎し、一方マイペースを崩さないイザベラは、中禅寺別荘生活を開始し何事にもチャレンジし、かつ自分の話に熱心に耳を傾けてくれる年下のイギリス女性を好ましく思ったはずである。

ビショップ夫人とダヌタン夫妻は9月23日の帰路で汽車が同じだったので、メアリーは「お世話をしてあげた。東京へ着いたのは午後9時であった^{注22)}。」と日記に記す。このシーンも想像すると実に微笑ましい交流である。63歳の冒険家の夫人を、親子ほど年の離れた47歳と38歳の公使夫婦が「お世話をした」のである。

なお翌明治30年(1897)3月から12月にかけて

てダヌタン夫妻は賜暇帰国となりロンドンにも長く滞在するが、その際同じく賜暇帰国中のサトウと会うだけでなく、ピシヨップ夫人とも昼食をとともにするなど交流を深めた^{注23)}。

夫妻の中禅寺別荘生活は明治31年(1898年)の帰任後再開され、メアリーは外国人グループの中心として活躍し、避暑地生活を楽しむ。

在京の外交官たち、皇太子時代の大正天皇をはじめ日本の貴族や実業家、上級官吏たちが山内だけでなく中禅寺湖畔に注目する中、外国人の中心にはサトウがいてメアリーがいたと言っても過言ではない。

男体山ヨットクラブの会長は英国の館長が務めることになっているが、その恒例のヨットレースにはメアリーも加わっていた。明治32年(1899)8月16日の日記によれば、夫のアルベールが審判役で湖畔にとどまり、夫人のメアリーは自分のボート「アドミラル号」の舵手として9隻のボートの先頭を切って走っていた。するとドイツ公使ライデン伯爵のボートが転覆しているのを発見し救助したと言う。ボートに詳しいメアリーの意見では、「ボートに比して大きすぎる帆を張って、このスポーツをほとんど知らない人々^{注24)}」によってヨットレースが行われていた。

つまり、それだけ多くの外国人がこの地を訪れ、参加しているのである。別荘を持たずとも、レーキサイトホテルに宿泊するか、友人知人の別荘に招かれて中禅寺湖畔の夏を満喫する。たとえば、英国大使館駐在武官のビゴットによれば、「夏休み一わたくしたちの場合はいつも中禅寺であった」し、「中禅寺の青木邸に泊まった」^{注25)}。外務大臣青木周蔵の一人娘ハンナ(花子)の結婚時にクリスチャンネームの名付け親となったのはダヌタン夫妻だが、その青木も砥沢に向かう道沿いの湖畔に別荘を構えた。現在

はフランス大使館別荘である^{注26)}。

雄大で美しい、しかし時には嵐やがけ崩れを招く自然に囲まれながら、ダヌタン夫人は多くの友人たちとこの地の生活を堪能した。公の生活が東京であるとすれば、ここでは私的空間が広がり、自由に外国人中心の交流ができる。首席夫人の重圧もない。

しかし彼女のあるいは夫の仕事場はあくまでも東京である。東京でメアリーは夫の公務と健康に気を遣う日々が、年月を追うごとに増していった。

第4節 夫の客死と帰国

東京でもメアリーは忙しい。日記に見る限りでも、天皇皇后両陛下への謁見、皇室との親交、外交団との交誼、首席夫人としての公務活動、日清日露両大戦時の平和活動、赤十字を初めとする慈善活動などなどが続く。その上、メアリーの才能なしでは出来ない活動も喜んで行った。たとえば『ジャパン・メール』紙への平和を祈願する詩の掲載、劇の上演等による慈善募金活動、および執筆活動などである^{注27)}。

しかも女性ならではの細やかさと誇りも持っていた。日記における会話の描写や夫人仲間の衣装のことなどには、イギリス女性として当然の心配りが感じられる。だがメアリーの日記に最もあふれているのは、夫アルベールへの愛情である。

二人は互いを思いやる夫婦である。互いの意図や感情を汲みとりあっていた。

たとえば来日後はじめての結婚記念日である11月17日、アルベールはメアリーに「ふっくらした花が95もついた白菊の大きな鉢」を贈った。じつは1週間前の11月10日に赤坂離宮の御苑での寒菊会にて、メアリーは午餐のあと菊の鉢を飾ったテントを大山巖大将のエスコートのもと

に巡り、伝統的な方法で育てられ700もの花をつけた菊の大輪に魅了されたのだが、その姿を夫が見ていたのである。そのプレゼントは「まるで雪の山のように」メアリーの部屋に運び込むのに、6人の人手を要したと言う^{注28)}。

また、二人は信頼しあう夫婦である。妻は夫をととても誇りに思っていた。

たとえば初めての賜暇帰国前に、アルベールが東京倶楽部で英語スピーチをした際、「話し方も内容もとてもよかった」し、その人柄から「いままでにないほどの多数の出席」があったことをサトウから聞き嬉しく思っている^{注29)}。

あるいはダヌタン家にも誇りを抱く。2回目の賜暇帰国の途中、ローマで教皇レオ13世に非公式に拝謁したメアリーは、教皇が以前ブリュッセルにローマ教皇大使として駐在のとき、アルベールの叔父の上院議長と交際があったことを知り感銘を受ける^{注30)}。さらにベルギーに賜暇帰国すると、アルベールは国王から任務をまことに立派に果たしていると高評価を得るのだが、「このほめ言葉に値することが良く分かっているのは、彼の妻である私以上のものはいないはず」と言って嬉しく思い、また満足している^{注31)}。

このように夫に対し公私共に尊敬の念を抱いていた。いっぽう夫も、妻の存在を重要に思っていた。

年月がたてば日本から他国への異動の噂がささやかれる公使夫妻であったが、その際も妻への思いやりがあった。駐日3年の明治29年夏前にはワシントンの公使の地位を提供されたが、「経費がかかりすぎる」という理由で断る。あるいはヴァチカン公使の地位は、「妻を同道できないから」といって断った。日本のあとはローマかウィーンに行くことを期待していたようだ。これらの人事への想いは気心の知れた公使仲間のサトウに語ったものだが^{注32)}、いずれも家庭、

つまり妻を重視していることの現れである。それぞれの実家から遠くなく、妻も喜んでくれるような赴任先を望んでいた。明治30年(1897)第1回の賜暇のときには、メアリーによれば「リスボンでの地位が提供されたが、彼は強い魅力のある極東の中心地に残るほうを選んだ」という^{注33)}。こうして、夫妻は駐日公使勤務を続けていく。

ベルギー国王がダヌタン公使の任務を評価しただけでなく、日本側も高くその功労を讃えるとともに、明治天皇皇后両陛下ならびに皇太子からも親しくお言葉を賜る機会が頻繁にあった。明治31年2月には勲一等旭日大綬章を授与され、また天皇皇后両陛下からも帰国のたびに夫妻を招きそれぞれに下賜品があった。

17年間の間に4度の賜暇休暇をとり、5回目のそして最後の来日となった明治43年(1910)、アルベールは5月ごろから持病の腎臓炎が悪化し、7月25日に永眠した。享年61歳であった。メアリーは52歳の未亡人となる。

医療や交通の便の制約もあり、当時外交官が東京で客死する例は稀ではない。ダヌタン夫妻自身もサトウの前任の英国公使やドイツ公使の不幸を見ている。そうは言っても夫を異国の地で見送ったメアリーの悲嘆はいかばかりであろうか。

夫の死後2週間たった8月、メアリーは日光に静養に行き、兄のライダー宛に次のように手紙をしたためる。

わたくしはいまだに茫然としています。最愛の夫の死が私にとってどれほどの打撃であったか、言い表すすべがありません。私の人生は終わったような気がしています。(…) 私たちは24年間夫婦であっただけでなく、気の合った仲間であり、本当の友達

でした^{注34)}。

思い出の地日光を最後に訪れた後、9月30日、メアリーは皇后陛下に宮中に召されて金1万円を下賜された。アルベールが臨終に際して妻の行く末を案じた遺奏書を作成したためと言われる。11月15日、メアリーは多くの親しかった人に見送られて東京を発ち、日本郵船の加茂丸で姪と共に横浜を出航した。

帰欧してローマ、ブリュッセルに滞在後ロンドンに帰り、1912年4月、亡き夫の勧めに従って日本駐在時前半の日記を公にした。「序」は在英日本大使の加藤高明が寄せた。

メアリーの人生を3部に分けるとすると27年間のヴィクトリア時代のハガード嬢、24年間のダヌタン夫人、執筆や講演が彩る27年間の穏やかな未亡人となり、1935年サセックス州セントレナーズの自宅にて77年の生涯を閉じた。日光は第2部にて夫との私的な思い出の地として輝いた。

第4章 英国から日本へ

～ヴィクトリア朝の女性として～

第1節 大英帝国と日本

～西洋という世界の中心と周縁～

ヴィクトリア朝（在位1837年～1901年）の大英帝国と1868年に開国したばかりの日本では、世界における地位に格段の差がある。西洋文明至上主義から見れば、中央と周縁である。それゆえに、来日した英国人には日本を非文明国として上からの視線でとらえる人々がいる。あるいは逆に、非西洋世界であることに魅力を感じて来日した人々もいる。しかし複雑なのは、本国の伝統を重苦しく感じ、外の世界での自由な行動を望んで出立したはずなのに、尚も本国への思いを捨てきれない心境を持つ人々である。

世界のエリートとして来日した英国人は、周

縁の日本人に対しては英国の伝統を極力保ちながら接し、一方、本国のエリートの本流に対しては妙にコンプレックスを抱いていた。外交官のサトウも商人のグラバーも、大英帝国から抜けだし日本で自由に活躍したものの英国本流に憧れ、結局周縁の日本で英国人として最高の地位を求めることに満足せざるを得なかった^{注35)}。

そうした英国人たちの日本での憩いの場が、日光、ことに中禅寺であった。社会進化論^{注36)}の中では英国は先進、日本は後進であるが、日本の中では東京が先進・文明社会で、中禅寺は後進・自然の地である。東京は公の場であるが、日光は私的な場である。ヴィクトリア朝で教育を受けた英国人たちは、倫理的責務として自己と社会を改善させることが必須である。東京で公務あるいは慈善活動によりその責務を毎日果たしている彼らは、私的な場で自由になりたい。ことに女性にとっては、東京は日本人注視の中の社交の場で、本国以上にレディとして英国らしさを保ち控えめであることが求められるが、日光は同国人だけで楽しめる場である。それが日光と中禅寺湖畔の別荘が外国人に人気があった理由の一つである。

では日光滞在の先駆者であるイザベラ・バードとメアリー・ダヌタンの場合は、この英国レディとしての来日の意味は何であろうか。本論のまとめとしてもう一度考察する。

第2節 世界旅行家バードにとっての日本と日光

まず、英国を旅立つことから考えたい。

イザベラ・バードの旅は健康改善を目的に始まったが、出版業マレーの3代目ジョン・マレーの知遇を得た後は、旅行記執筆によりレディトラベラーの先駆者として世の中に認められ、仕事として旅を続けることになった。一方で王立スコットランド地理学協会の特別会員と

なっていたにもかかわらず、王立地理学協会では会員となることに評議会の許可を得られなかったことから明らかなように、女性のアカデミックまた社会的な地位の確立は相変わらず保守陣営に阻まれていた。しかしだからといって旅の挑戦を手控えるイザベラではない。むしろ、ビショップとの5年間の結婚生活をのぞけば、いつも何らかの形で旅にかかわっていた。ことに未亡人となってからの旅は、人間の付き合いよりも自然と向き合うことを優先し、危険も顧みない様相さえ呈していた。旅は彼女にとって人生の必須要件だったのである。

ではその旅は、英国内の様々なしがらみへの反発や、女性の自立を目指し女性解放の走りのような意図があったのか、つまり一言でいえば、ヴィクトリア朝への反旗を翻したかったのかというと、管見ではそうではない。イザベラはヴィクトリア朝のレディを捨てていない。むしろ、レディとして生きて行くために印税という生活上の糧を得る必要があったし、父・母・妹をそして夫を失った時の精神的なダメージから立ち直る必要もあった。ヴィクトリア朝の教育を受け、社会と自己の改善のために生きて行くのが女性の使命なら、それを果たす必要もあった。これらすべての必要を満たしてくれるのが、イザベラの場合旅であった。生きて行くための手段とさえいえる。旅の結果として自立を得たとしても、自立が目的で旅をしたのではない。

では英国から旅立つ先としての「日本」は、そして「日光」はどのような意味があったのだろうか。

明治11年(1878)、『日本奥地紀行』に結実する旅をした時点の「日本」は、挑戦すべき目的地、すなわち英国にとって未知の国であった。ことに未踏地の北海道に行きアイヌと生活することは社会進化論的にも意義深い。開港以来の

日本見聞録は発行されても、いまだに江戸とその周辺が主であり、ジャポニズムと呼ばれる日本や日本文化への関心が見られても、実際の現地情報は少ない。マレーの世界旅行シリーズに日本が加わるのは、サトウの *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan* (1884) を待たねばならなかったのだから。それゆえに1880年刊行のイザベラの著が好評をもって迎えられたのである。

しかし未踏地への挑戦者イザベラにとって「日光」は西洋文明の足跡を受け始めた地であり、物足りない面もあった。なぜなら既に外国人が何人も訪れ、東照宮の社務所も特記しないくらい、外国人の参拝に慣れてきているからである。一方イザベラは東照宮の芸術性と金谷家の人々の優雅さを高く評価し、日光でゆったりと寛いでいるところから、東京から地方への道中での最後の文明の地として、すなわち外国人の未踏地への境界線として、日光を楽しんだことも確かである。一步奥は未踏の地となるが、日光には日本の美と上流階級の清潔な日常がある。この微妙なバランスが魅力となり、彼女自ら有名な表現、「日光を知ったから結構といえる」を記して喜ぶ^{注37)}。

さらにこの接点の微妙なバランスの魅力が、次に来日するときには再び意味を持ってくる。ビショップとの結婚生活そして夫を亡くするという期間を経て、16年後、明治27年(1894)から明治29年(1896)にかけて朝鮮と中国を踏査する際、行き帰りにまた夏の休暇に立ち寄ったのが「日本」であり「日光」である。英国にとってアジアは挑戦すべき地であるが、イザベラにとって、日本はアジアの中では見知った地すなわち英国側の場所で、中国の奥地や朝鮮が未踏の地である。日本はヨーロッパとアジア、すなわち西洋人から見た文明と未開の境目に当たる。

この文明と未開の接点にあたる「日本」に立

ち寄り、東京では慈善活動の一環として孤児院の設立に携わり^{注38)}、旧知のサトウ公使と情報交換をする。そして日本の中の自然の地、伊香保と日光湯元温泉で休養し、日光と中禅寺湖畔では外国人避暑地での交流のひとつを楽しむ。挑戦の日々に対して文明と癒しの日々という非常に微妙なバランスを、アジアの中の「日本」あるいは「日光」で保っている。この癒しの場、あるいは緊急避難の場があったからこそ、イザベラはエネルギーを蓄えて、人生最後の最難関の旅を続けることが出来た。いみじくも日光から東京への帰途、ダヌタン夫妻によれば、彼女たちはビショップ夫人と同じ汽車で、「お世話をしてあげた」とのことである。

こうした同国人との交流を含めた癒しが、「日本」と「日光」に存在した。ヴィクトリア朝から遠路羽ばたいてきた鳥には、「日本」「日光」というちょうどよい止まり木が必要であった。

第3節 公使夫人にとっての東京と日光

ではメアリー・ダヌタンにとって、「日本」と「日光」はどのような意味があったのであろうか。

メアリーはダヌタン男爵と結婚したことによりベルギー人となったが、ハガード家の中では英国女性としての資質を十二分に発揮できた人生となった。つまり外交官夫人しかも館長夫人として来日したからこそ、ジェントリー階級出身女性の使命を果たす機会を得たのである。しかもヨーロッパからは遠い周縁国「日本」であるから、大使夫人でない公使夫人としても長期にわたり首席夫人として外交団のトップの座を得ることができ、その結果明治天皇はじめ皇族方と長期にわたり親交を深めることが出来た。まさに、ベルギーの国の代表をつとめ、教育を受けたイギリス女性としての自覚を意識する場面が多々あったのである。このような立場に

あってこそ、英国から日本へ来た甲斐もあったと言える。

その上、メアリーは少女時代の乗馬や日記のエピソードからも推測できるように、性格の上からも夫を支え控え目であることだけで満足する女性ではない。首席公使夫人として外交団のトップにあるからこそ、その個性も活かされる。慈善活動として日赤に行くだけでなく、劇の舞台に上がり、詩を新聞に発表するという多才振りは、外交官夫人として活躍するという背景があればこそ実現できた。

しかし、これだけ活躍したとしても、東京では気苦労が多い。日記をひもとくと、東京では天皇皇后両陛下への拝謁をはじめ皇族や日本の名士の方々とのお付き合いが連続する。もちろん名前を記して登場するのは外国人が多いし、頻出の三宮式部長夫人はイギリス人アリシア（和名八重野）である。とはいっても、正式な午餐・正餐をはじめ公の交際である。また同じ外国人同士であっても、イギリスのクラブ社会が東京でも展開し、「東京倶楽部」^{注39)}が象徴するように男性社会である。

したがってメアリーが最も自由に行動できたのが、「日光」である。ここで私的な時間と空間を楽しむことができた。避暑の典型的な過ごし方として、まず山内のホテルに滞在し、東京の暑さと蚊から避難する。村では皇太子殿下と偶然お会いし、フランス語の会話を交わす時もある。さらに中禅寺坂を登って湖畔の「気に入った」日本家屋に住み、自然を満喫する。大嵐に見舞われ浸水も経験したり、中禅寺坂が不通となり帰路に難儀をする時があっても、長期滞在を続ける。ボートをこぎ、ヨットレースに参加し、お茶をし、おしゃべりをし、食事会に招待しあう。明治33年（1900）夏、心配していた北京籠城の外交団が無事に発見されたニュースを聞けば、友人とシャンパンを開ける。アリシア

の夫君の三宮男爵くらいしか、日本人の名は日光での日記には登場しない。外国人仲間に限った気の置けない交際をする。夫が公務で東京に戻ってもメアリーは中禅寺に残るほどこの地を気に入っている。もっとも直ぐに夫はまた来見してくれるが。

日記にはこうしてメアリーが生き生きと活躍する夏の様子が活写されている。自由な外国人仲間との気の置けない交際は、自然の中での避暑とともに「日光」の魅力であり、かけがえない時間であった。「日光」の自由で気安い時間があったからこそ、「東京」での公使夫人の公の時間を全うすることが出来たとも言える。メアリーはダヌタン夫人として来日し、東京の仕事も日光の息抜きも、夫と共に楽しむことが出来た。ヴィクトリア期の女性としてその資質を十二分に生かすことが出来た、まことに幸せな例と言える。

おわりに

母国を離れ外国を旅する、あるいは生活するという。それが新鮮な喜びとなるか落ち着かない不安となるかは、当人次第である。特にその行き先に母国人が数少ない場合はなおさらである。そんな時代に、その旅先あるいは赴任先の外国で同国人との交流があることは、当人たちにとってプラスに作用する。

日本史上類まれな価値を有する東照宮がまずは訪問のきっかけとなり、次に涼しい避暑地、美しい自然と整ったホテル・別荘というハード面が吸引力となり、最後に同国人はじめ外国人の集まれる気の置けない社交界があることが強力な魅力となる。そうしたすべてのプラス面を日光と中禅寺は兼ね備えていた。

19世紀の後半、外国人が明治の日本を訪れた時、東京からほど遠くない地に日光は位置していた。とりわけ、女性の生き方に制約のあるヴィ

クトリア期に来日した二人のイギリス女性にとって、日光と中禅寺は有難い存在であった。

イザベラ・バード、アーネスト・サトウ、メアリー・ダヌタン。彼らは快活で時には穏やかな縁を日光で結んだのである。

(後記)

今回の執筆にあたり、栃木県日光市の東照宮御文庫の皆さまには大変お世話になり、ことに広報部長稲葉尚正様、山作良之様には多々ご指導いただきました。また元東照宮禰宜、青山隆生様にはこの調査のきっかけを頂きました。皆様に心より感謝申し上げます。

注

注1) 東照宮は家康の遺言により日光に建造され、江戸時代はもちろん平成まで継続的修理が為され、平成11年(1999年)世界遺産に登録された。成立については、井戸桂子「金色の力」『日本文化研究』第9号(駒沢女子大学日本文化研究所、平成23年)201-222頁、修理については、大河直躬「日光東照宮における保存・修復の建築史的意義」『大日光』第78号(日光東照宮、平成20年)2-6頁、および山作良之「東照宮『昭和の大修理』トピック」『大日光』第80号(日光東照宮、平成22年)112-120頁を参照。

注2) 『日光叢書 社家御番所日記』第二二巻、(日光東照宮社務所、昭和57年)594~596頁。

注3) 書籍としての『社家御番所日記』は、明治3年までのものである。明治4年からは、活字化されていない。筆者は、石川速夫氏による元の日記からの文字起こし原稿を、御文庫のご厚意で読ませていただいた。そのため、以下の社務日記は、【社

- 家御番所日記』と記す。
- 注4) サトウと日光については、井戸桂子「アーネスト・サトウにとっての日光中禅寺」『駒沢女子大学研究紀要』第16号（平成21年12月）。
- 注5) エミール・ギメ、青木啓輔訳『東京日光散策』（雄松堂出版、1987年）149頁。
- 注6) 手塚潤一『日光の風景地計画とその変遷』（随想社、2006年）46頁。
- 注7) 中禅寺湖畔の条件整備については、井戸桂子「ポール・クロード大使と中禅寺別荘」『駒沢女子大学研究紀要』第14号（平成19年12月）。
- 注8) バードの生涯は主に、Pat Barr, *A Curious Life for a Lady, The Story of Isabella Bird* (Faber and Faber, 1970) を参照とした。文中の「 」の言葉は、同書掲載のイザベラ・バードの手紙からの拙訳である。その他以下の書を参考にした。
井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』（講談社現代新書、1998年）（本書は、ヴィクトリア朝のレディの意味についても参考とした）
ドロシー・ミドルトン著、佐藤知津子訳『世界を旅した女性たち』（八坂書房、2002年）
元田作之進『日本聖公会史』（普光社）（日本図書センター、2003年）
- 注9) バードの日光に関する記述は以下の原著からの拙訳と意識である。L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan*, (Vermont & Tokyo, Charles Tuttle Company, 1990) pp. 53-80.
- 注10) *The Diaries of Sir Ernest Satow, British Minister in Tokyo* (1895-1900) edited and annotated by Ian Ruxton, (Edition Synapse, 2003), (以下、*Diaries* と略す。) p. 107, p. 112.
- 注11) エリアノーラ・メアリー・ダヌタン、長岡祥三訳『ベルギー公使夫人の明治日記』（以下、『明治日記』と略す。）（中央公論社、1992年）118頁。原題 Baroness Eleanora Mary d'Anethan, *Fourteen Years of Diplomatic Life in Japan*
- 注12) ダヌタン夫妻の生涯は上記の訳者長岡氏を参考とした。
- 注13) 本稿での日付と行き先は『明治日記』を典拠とする。直接に引用した時のみ、ページ数を記す。『明治日記』41頁。
- 注14) 『明治日記』62頁、63頁。
- 注15) 同書64頁。
- 注16) 同書66頁。
- 注17) 同書95頁。
- 注18) 同書97頁。
- 注19) 同書117頁。
- 注20) *Diaries*, p. 114.
- 注21) 『明治日記』118頁、119頁。
- 注22) 同書127頁。
- 注23) *Diaries*, 28 June 1897, p. 198.
- 注24) 『明治日記』162頁。
- 注25) サー・フランシス・ビゴット、長谷川才次訳『断たれたきずな』（上）（時事通信社、昭和38年）123頁、59頁、61頁。
- 注26) 中禅寺湖畔の大使たちの別荘生活については、井戸桂子「大使たちの日光～クロードは何を見たか～」*L'Oiseau noir, Revue d'Etudes Claudeliennes*, XV, (クロード研究会 2009年) pp. 1~34.
- 注27) 日露戦争の終結を願っての詩と慈善劇については『明治日記』352頁から354頁。小説執筆については同書329頁。
- 注28) 観菊会は同書18頁から、結婚記念日については同書23頁。
- 注29) 同書145頁。

- 注30) 同書245頁。
- 注31) 同書250～51頁。
- 注32) *Diaries*, 11 July 1896, p. 110.
- 注33) 『明治日記』 150頁。
- 注34) 同書406頁。
- 注35) サトウの心境については井戸桂子「アーネスト・サトウにとっての日光中禅寺」、グラバーについてはマイケル・ガーデナ著、村里好俊、杉浦裕子訳『トマス・グラバーの生涯』（岩波書店、2012）を参照。
- 注36) ダーウィンの進化論を人間社会の中にも応用し、社会を序列化した議論が見られた。
- 注37) *Unbeaten Tracks in Japan*, p. 54 「日光に9日滞在したから「結構」という言葉を使う資格が出来た」と記す。
- 注38) 孤児院の設立については、高畑美代子「イザベラ・バードの日本旅行記以後の日本との絆～日程とジョンビショップ孤児院・その他の寄付を中心に」『英学史研究』日本英学史学会 42号 2009年。
- 注39) 東京倶楽部は明治17年（1884年）に設立されたが、井上馨外務大臣の発案で英国に範を取ったジェントルマンズ・クラブである。ダヌタン公使も賜暇帰国の前に英語スピーチを行い、メアリーはサトウから英語も上手でよいスピーチだったと聞かされ安堵している（注29）も参照。）ほど、外交官にとっても大切なクラブであった。